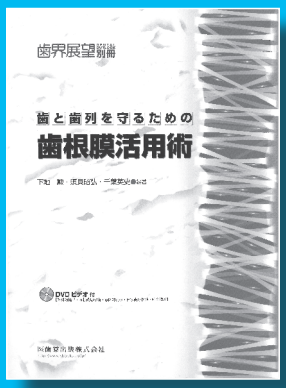
Book Review

歯界展望別冊
歯と歯列を守るための歯根膜活用術
DVD ビデオ付



下地　勲・須貝昭弘・千葉英史　編著

A4 判変，148 頁
定価 6,090 円
（本体 5,800 円+税 5%）
医歯薬出版刊

Reviewer
寺田周明
（富山県・寺田歯科医院）

今から 20 数年も前になるが，スタディグループ火曜会 35 周年記念大会を控えた症例検討会に参加させていただく機会を得た．

バブル最盛期の 1980 年代後半は，経済も社会もまさにバブルの泡のなかで，国民の多くも成長神話に酔いしれていた．歯科をとりまく環境もこの例外ではなかった．

しかし，この記念大会のメインテーマは，当時としては地味とも思える「歯根膜靭帯の臨床像」であった．地方からのおのぼりさんにはあまりにも衝撃的で，落ち込んで帰路に着いたことを今も鮮明に覚えている．

先頃，出版された歯界展望別冊『歯と歯列を守るための歯根膜活用術』は，火曜会の 3 名の先生方が編者となってまとめられたもので，時代は変わっても，この一連の“歯根膜の生命力”の流れは受け継がれている．

第 1 章は，歯根膜と臨床とのかかわりの総説であるが，より詳細にとなれば，編者のお一人である下地　勲先生の『歯根膜による再生治療―インプラントを考える前に―』（2009 年・医歯薬出版刊）が好書であろう．

第 2 章は，歯内療法，歯周治療における難症例，歯の保存のための歯根膜の活用について，である．日々の臨床において，対象となる症例には事欠かない．

そして第 3 章では，歯列を守るための歯根膜の活用についてまとめられている．小児の歯列の育成，少数歯欠損，多数歯欠損に分類され，最後に歯根膜を補う手段として最小限のインプラント応用例が示されている．

また付録の DVD「歯根膜を活かした治療法の術式」には当代の名人による術式が収録されており，どれも臨場感にあふれる．

全体を通して，共著にありがちな組み立ての無理や，X 線写真や口腔内写真のばらつきなどからくる異和感がないのは，さすが臨床の深さと奥行きを知りつくした 3 名の編者に負うところが大きい．

基本的な手技はもとより，長期にわたって患者さんとかかわってはじめて見えてくるもの，そのための臨床資料の保存や管理，術後評価といった重い下積みの部分も深く読みとりたい．臨床とは結局のところ人そのもの，人間力にほかならないことが見えてくる．

この数年，“置換医療”の登場によって従来の欠損歯列への対応はもとより，“予知性”の大義名分の下，歯牙保存の概念さえ大きく変わろうとしている．本書はこうした流れを脇に，止むに止まれぬ思いで世に送られたものと言っても過言ではあるまい．要所に賢者は存在する――安堵にも似たものを覚える感銘の一冊と言えよう．

折しも，2011 年 3 月 11 日の東日本大震災で地震と津波は多くのものを奪い，そしてもろい原発がそれに輪をかけた．立場はちがっても，人々は現実の対応にその答えを出せないままでいる．

震災直後，作家・辺見庸氏は共同通信社に震災緊急特別寄稿を寄せているが，以下はその抜粋である．

「津波にさらわれたのは，無数のひとと住み処（か）だけではないのだ．人間は最強，征服できぬ自然なし，人智は万能，テクノロジーの千年王国といった信仰にも，すなわち，さしも長きにわたった「近代の倨傲（きょごう）」にも，大きな地割れがはしった．」

「すべての職業人がやるべき仕事を誠実に追及できるのか．日常の崩壊とどうじにつきつけられている問いとは，そうしたモラルの根っこにかかわることだろう．」

昨今の経済や資本の論理の対極にも位置するだけに，宗教の領域にも迫るものがある．医療にも，問われているのはこの自然のいのち，倫理の根幹，すべて本質とのかかわりではないだろうか．

本書の精鋭の執筆陣も同じ想いであろう．